

別室登校生徒支援の方向性を共有する  
校内体制についての研究

—「自己目標設定シート」を活用して—

2020/3

四日市市教育委員会 教育支援課

## はじめに

本市では、新学習指導要領の本格実施を間近に控え、子どもたちが自らの人生を拓き、生き抜く力を持つことができるよう「四日市市新教育プログラム」を構想しています。その柱の1つである「論理的な思考で道筋くっきりプログラム」には、プログラミング体験等を通してプログラミング的思考を育むなど、これからの時代に求められる論理的思考力を育成する内容が盛り込まれています。

また、「問題解決能力向上のための授業づくりガイドブック2」では、解決して得られたことや解決方法の過程を振り返り、その正しさを確認したり、次の問題に活用したりする活動を含んだ第5プロセスを授業づくりの重要なポイントとしています。

一方、不登校の課題に対しては、改修整備及びセラピストの配置体制の充実が図られた「登校サポートセンター」を核とした取組を進めています。

そうした本市の現況を鑑み、本年度は、3つの課題研究に取り組みました。1つ目は、乗法の筆算の学習において、Scratch を用いてプログラミング的思考を意識した授業を構成することが、論理的思考力及び計算の技能をより高めることに有効であるかを検証しました。2つ目は、算数科の授業で、学習内容と解決過程について記述させる振り返り活動が、児童の学習意欲に及ぼす効果について明らかにする研究を行いました。また、3つ目は、登校サポートセンターの「がんばりチェックシート」を学校での別室運営に取り入れることで、生徒に合った支援の手だてを考えるとともに、それを教職員間で共有することで、より見通しをもって支援にあたれるような校内体制づくりにつながるかを検証する調査・研究を進めてきました。

その成果を調査研究報告書として、ここにまとめました。これらの研究成果が、学校・園の日々の教育実践に活用されることを期待します。

末尾になりましたが、本課の研究調査を進めるにあたって、御指導・御助言いただいた国立教育政策研究所初等中等教育研究部総括研究官の山森 光陽様をはじめ、研究協力員並びに調査・実践面で御協力いただきました学校等の関係者の皆様に心から感謝の意を表します。

令和2年3月

四日市市教育委員会教育支援課  
参事兼課長 中村 隆志

— 目 次 —

1 問題	1
2 目的	4
3 方法	4
4 結果	8
5 考察	18
6 研究のまとめ	20
[引用文献]	22
[資料]	23

# 別室登校生徒支援の方向性を共有する校内体制についての研究 —「自己目標設定シート」を活用して—

## 1 問題

### 1.1 別室登校の位置づけ

本市では、不登校児童生徒の再登校に向けた受け入れ体制である別室登校について、「別室は、ここであれば来られるという子どもたちにとっては大事な居場所であるため、全職員がそのような子どもたちの状況を知り、理解していることが大切であり、別室への登校は本人・家族・学校にとっても、コミュニケーションの機会が確保しやすく再登校に有効である」という考えを示してきた。（四日市市教育委員会、2005）

また、別室登校は、不登校から再登校に至る過程だけではなく、登校状態から長期欠席に至る可能性のある児童生徒を食い止める過程でも、学校内での居場所として機能すると考えている。

令和元年の文部科学省初等中等教育局長通知『不登校児童生徒への支援の在り方について』においても、不登校児童生徒に対する効果的な支援の充実のために「保健室、相談室及び学校図書館等を活用しつつ、徐々に学校生活への適応を図っていけるような指導上の工夫が重要である」と示されている。

### 1.2 学校内での別室運営の課題

山本・小泉・服部・横山・中川・由良（2011）は京都府内（京都市を除く）での実態調査で、教職員は「別室登校」児童生徒の対人関係の指導、「別室」指導担当者と他の教職員との連携の難しさなどにおいて、負担感を高くもっていることを明らかにしている。また、別室登校生徒が安心して過ごせる場所（部屋）の確保が難しいこと、校内のサポート体制が整っていないことを問題点としてあげている。望ましい別室環境を考える中で、校内のサポート体制は別室登校生徒が学校で過ごすための重要な核であり、学校としての組織的なサポート体制が整うことや、教員間で別室の理解が共有されることが必要であることを指摘している。

隅元・富本・松本（2012）は別室運営の課題として、教職員間の意識にずれが生じることや別室登校に関わる教職員の負担が大きくなること、別室の存在価値を認める意見が多くある中で、学校によって運営や児童生徒への取り組みは大きく異なることを指摘している。

また、平田（2018）は「別室を活用した支援に関する援助構造やプログラムが学校により大きく異なることから、ある学校では機能したもの、もしくは経験のある教員であっても、学校が違えば十分に機能しないといった課題がある」と述べている。

本市内の小中学校においても、教職員は別室に登校している児童生徒へのかかわりを、各校の設備面や人員数等に応じ、可能な範囲で行っているところである。令和元年7月に、市内中学校（22校）で別室登校の現状について行ったアンケート結果によると、教室に入ることを渋りがちな生徒に対し別室での対応を行っている学校は15校（毎日対応している学校が11校、週のうち回数を制限して対応している学校が4校）であった。平成30年度に本市で行ったアンケート調査（小学校38校、中学校22校）の結果では、別室登校対応を行っている中で、もしくは今後別室登校対応を行うにあたって課題と考えられることとして「対応できる部屋がない」（小17校、中10校）、「対応できる職員がいない」（小30校、

中 19 校),「系統的な指導内容の計画が困難」(小 25 校, 中 13 校),「支援方法の統一が困難」(小 13 校, 中 7 校)との回答がある (Figure 1)。

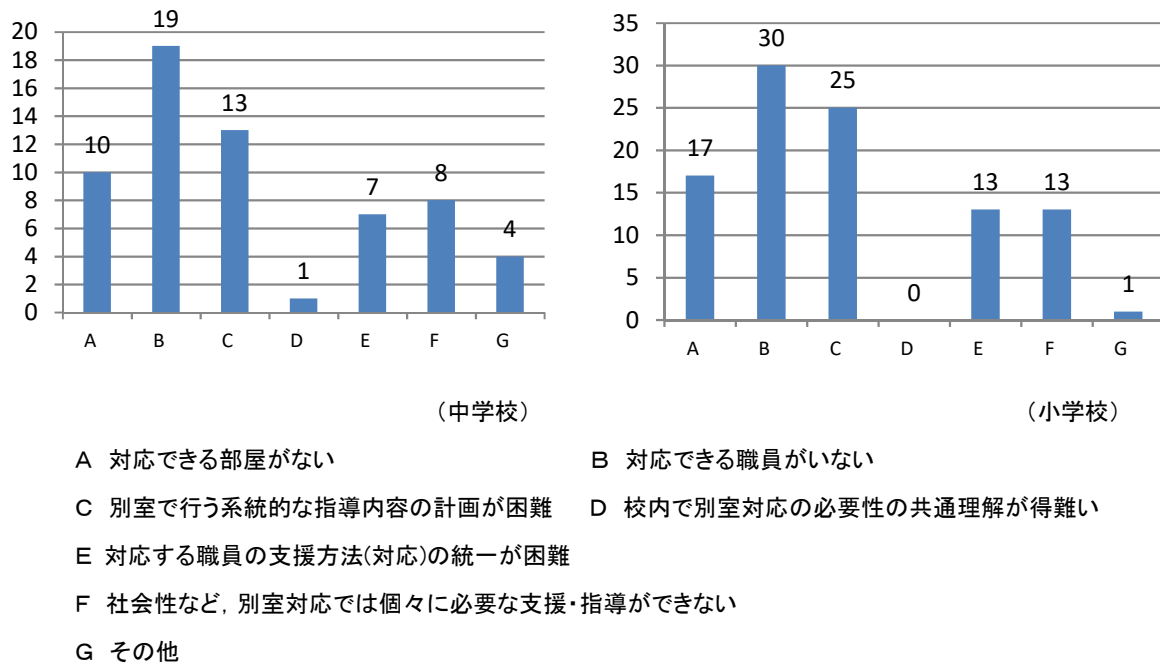


Figure 1 別室登校対応の課題

### 1.3 別室登校についての先行研究

京都府教育委員会が府内全公立小中学校(京都市立を除く)を対象に行った調査(平成21年度)によると,調査対象小学校の26%,中学校の78%で別室登校が実施されていた。また人数としては,年度内に,小学校では平均1.6人,中学校では4.4人が別室登校しており,主に指導しているのは養護教諭(25%),学級担任(19%),教育相談・生徒指導担当者(17%)であった。別室での活動内容としては,個別の学習活動や自習が多く行われていた。

別室登校後の変化として,完全に教室に戻ったり,教室登校が増えたりした子どもは,小学校では49%,中学校では27%であった。教室への復帰率が高い学校は,担当する教職員の教室復帰への意識が高いこと,また,中学校では「自習」よりも「学習指導」,「教科学習以外の活動」よりも「教科学習を中心」に行っていた学校の教室復帰率が高いことが示された。また,かかわり方として「直接的コミュニケーション」「家庭への働きかけ」「教室とのつながり」因子が教室復帰へと有意な関連があった。事例研究からは,①キーパーソンを中心とした一対一のかかわりから徐々に人間関係を広げる,②学級とのつながりを大切にする,③別室登校の子どもたち同士のかかわりを大切にする,④教室や部活動の友人関係を大切にする等,様々な知見が得られた。別室登校の子どもたちの教室復帰に向けては,単に場を設定するだけでなく,教職員や他の子どもたちとの,直接の関係性を深めるかかわりが効果的であることがわかった。

山本・小泉・服部・横山・中川・由良(2012)は,京都府の研究指定8市(八幡市,城陽市,木津川市,亀岡市,綾部市,福知山市,舞鶴市,宮津市)で聞き取り実態調査を行い,効果的なかかわりをまとめている。その中で別室の運営面について,児童生徒の状態を見極めたうえで適切な方向性を見出す

ことが必要であること、児童生徒を理解することでかかわりや連携体制のスタンスが決まってくること、校内委員会でじっくり検討する機会を定期的に設けたり、研修等で学んだりすることで方向性が定まるとともに教職員の力量も向上し、課題が解決されていくことが多いことを指摘している。

小泉・中垣・中川・由良・奥澤・吉田（2015）は、別室登校児童生徒への指導に関わる教職員間の情報共有が教職員の主体的な取り組みを促進し、主体的な取り組みは教職員の負担感の軽減に効果的であることを明らかにしている。また、見立てが別室指導への理解を深め、校外資源の活用を導入する環境をつくることで別室に関わる教職員の負担感を軽減することを指摘している。

平田（2018）は、初期段階における生徒のアセスメント（生徒の状態にあった働きかけ）、支援の具体化、早期介入へのつながりやすさが別室を活用した支援の意義であり、このようなシステムが学校に存在することは、担任教師や特定の教職員による生徒や問題の抱え込みの予防、教職員間での情報共有による教職員の負担の軽減へとつながることを明らかにしている。

青木（2016）は、別室登校（保健室登校）を効果的にすすめるためには、養護教諭と学級担任、学年所属教員の連携や学校スタッフ間の共通認識等、組織的運営が重要であるとして「護られた世間」としての保健室の機能についてまとめている。

阿部・青木（2017）は、児童生徒の教室復帰に影響を与える要因として別室内での教職員のかかわり、所属学級とのかかわり、別室内での児童生徒同士のかかわりが有意な傾向であったこと、別室登校を効果的に活用するために、かかわりの形態、使用する部屋、時間割や記録、担当者の役割、児童生徒の回復段階に応じた支援の工夫が必要であることを指摘している。

#### 1.4 登校サポートセンターのアセスメントシートを校内別室で活用することにより考えられる効果

山本他（2012）によると、八幡市の調査研究では、適応指導教室と学校の別室をつなぐ取り組みとして、児童生徒が別室登校を始める際に安心して活動するための計画を、本人と適応指導教室の指導員、学校の別室担当者が共有することが有効であったという事例をあげている（目標、気持ちの可視化、コミュニケーションツールとしての機能等）。この成果を、別室から教室復帰に向けた取り組みへとさらに活用していくためには、別室担当者の配置や専門的な機関との連携が必要であることを指摘している。

これまでに四日市市登校サポートセンター（以下「登校サポートセンター」、平成30年度以前は「適応指導教室」）では、通級生に対し支援段階及びスキル別に支援を行うことで、個別での相談や活動から集団での活動参加へと段階を経てステップアップできるような支援体制を整えてきている。例えば、通級生（抽出）に対し、過去3年間の学校復帰事例及び部分登校の継続事例をもとに支援計画を立案し、その計画に沿ってアセスメントシートを用いて個々の課題を明確にしたうえで、対象通級生と指導員が週1回程度、30～60分の時間でスキルトレーニングに取り組んだ。その結果、部分的にはあるが集団に適応していける力や自信を育むことができ、再登校の一助となった（本市適応指導教室 研究調査報告第397号）。また、通級生（20名）に「がんばりチェックシート」（アセスメントシート）を使用させ、重点的に力をつけたいスキルを決定したうえで、指導員と通級生で目標設定を行い、週1回程度スキル習得のための相談およびトレーニングを行った。その結果、個別指導をしていた通級生が集団での学習・体験活動に参加できるようになったり、別室への登校、学校行事の見学もしくは参加ができるようになった通級生が増えたりした（同 研究調査報告第400号）。

現在も、登校サポートセンターでは通級生と指導員が「がんばりチェックシート」を使用して個々の

課題を把握し(アセスメント),その情報を指導員間でも共有し定期的に見直しながら(カンファレンス),それぞれの課題を克服するための歩みを進めている。指導員は,支援の方向性を共有し,見通しをもって通級生への支援にあたることができている。

そこで今回の研究では,登校サポートセンターの「がんばりチェックシート」(アセスメントシート)を学校での別室運営に取り入れ,別室登校をしている児童生徒の課題を把握し,その情報を職員間で共有する。これにより学校内でも教職員が支援の方向性を共有し,より見通しをもって支援を進めやすくなるのではないかと考える。また,別室登校をしている児童生徒にとっても,教職員とともに自己の課題や目標を共有しながら,教室復帰へ向けスモールステップで,できることを増やしていけるのではないかと考える。

## 2 目的

本研究の目的は,登校サポートセンターの「がんばりチェックシート」(アセスメントシート)を学校での別室運営に取り入れることで計画性を持ち,別室登校生徒の現状や課題を把握し,その生徒に合った支援の手だてを考え,それを教職員間で共有することで,教職員が支援の方向性を共有し,より見通しをもって支援にあたれるような校内体制づくりにつながるかを検証することである。

## 3 方法

### 3.1 研究概要

令和元年9月から11月にかけて登校サポートセンターの「がんばりチェックシート」をもとに作成した「自己目標設定シート」(資料1)を学校での別室運営に取り入れて実践する。実践の前後に,別室での支援に関わる教職員に対しアンケート調査を行い,その結果比較により教職員の意識の変化(別室登校生徒対応の「計画性」「困難の度合い(生徒の課題の把握,教職員間の連携)」「支援の見通し」について)を検証する。また,該当別室登校生徒について,教室復帰に向けた行動の変化を見る。

### 3.2 研究対象

別室登校による生徒支援を行っている市内中学校(4校)にて調査を行う。「自己目標設定シート」を使用しカンファレンスを実施する学校(a群),「自己目標設定シート」のみ使用する学校(b群)を各2校ずつとした。

### 3.3 研究方法

#### 3.3.1 研究対象校での実践

別室登校生徒のアセスメントと、教職員間での支援の方向性の共有を行う。

(1) 「自己目標設定シート」の使用（アセスメントと情報共有）

研究対象校で、別室登校をしている生徒と学級担任が「自己目標設定シート」を使って課題と目標（短期目標と長期目標）を考える。その後、使用した「自己目標設定シート」は教職員間で供覧し、生徒本人の課題と目標を情報共有したうえで支援にあたる。その後1か月経過を目途に、別室登校をしている生徒と学級担任とで「自己目標設定シート」を再度使い、課題と目標について見直しを行う。

(2) カンファレンスの実施（a群のみでの情報共有）

a群の2校については、供覧に加えてカンファレンスを行い、支援の具体的な方法、方向性について教職員が話し合っ共有する時間をとる。

#### 3.3.2 検証方法

(1) 教職員の変容（事前及び事後アンケート）

研究対象校の教職員に対して事前にアンケートを行う（資料2）。対象は、別室登校をしている生徒の学年担当教職員、校内委員会（不登校対策委員会等）の教職員とする。アンケートでは、別室登校生徒対応の「計画性」「困難の度合い（生徒の課題の把握、教職員間の連携）」「支援の見通し」がどのくらいあるかを4段階で尋ねる。2回目の「自己目標設定シート」使用后、教職員に対し再度アンケートを実施し、事前のアンケートと比べて4段階評価の変動を見る。また、記述にて「自己目標設定シート」使用にあたっての意見・感想を収集する。a群の2校については、カンファレンスについての意見・感想も収集する。

(2) 別室登校生徒の変容（行動の変化の記録）

① 「自己目標設定シート」の得点の変化

1回目と2回目の「自己目標設定シート」の得点の変化を見る。

② 別室登校生徒の行動の変化

教室復帰に向けた行動の変化（「前進（教室完全復帰、教室登校増加）」「停滞（別室登校の継続）」「後退（別室登校回数減少、不登校になった）」）と、「自己目標設定シート」で立てた目標に向けての行動の変化（「目標達成」「目標達成に向け進捗している」「目標達成は難しく、目標の見直しが必要」）を見る。

研究方法を Table 1 に一覧で表す。

Table 1 研究対象校で実施すること

実施すること	a 群	b 群
「自己目標設定シート」使用 【別室登校生徒と教職員】	○	○
「自己目標設定シート」供覧 【教職員】	○	○
カンファレンス実施（「個別支援シート」使用） 【教職員】	○	—
事前・事後アンケート 【教職員】	○	○



### 3.4 別室登校生徒に対する支援の方向性を見立て、教職員間で共有するための手だて

#### 3.4.1 「自己目標設定シート」について

別室登校生徒の現状や課題を把握し、支援の方向性を教職員間で共有するために、登校サポートセンターの「がんばりチェックシート」をもとに「自己目標設定シート」を作成した。「自己目標設定シート」を学校の別室で使用する際、①別室で生徒の支援にあたる教職員が、生徒の現状や課題を知るためにシートを挟んで生徒と直接話し合えること、②別室内で生徒が立てた目標（今がんばりたいこと）を、直接支援にあたる教職員だけでなく、学年内、学校内の教職員間で共有できることが利点であると考えた。

「自己目標設定シート」では9項目のアセスメント項目をあげた。各項目は、教室復帰に向けてつけたい3つの力（集団参加力・生活改善力・意思表示力）に関連した内容としている（Table 2）。この3つの力は、支援目標が具体化しやすいスキルとして、登校サポートセンターの「がんばりチェックシート」の項目に関連付けられているものである。

Table 2 「自己目標設定シート」の9項目と別室登校生徒につけたい3つの力

アセスメント項目（全9項目）	つけたい力
1. 登校の方法	【集団参加力】 ・教職員と一緒に、集団の中で過ごせる力 ・他の生徒と一緒に、学習や活動ができる力
2. 教室との行き来	
3. 別室での主な過ごし方	
7. 部活動のこと	
5. 身体のこと	【生活改善力】 ・自分の生活を振り返り、改善する力
8. 生活リズム	
9. 身だしなみ	
4. 先生との会話	【意思表示力】 ・気持ちを言語化する力 ・場面に合わせた伝え方ができる力
6. 学校のこと	

「自己目標設定シート」の各項目は4段階にわかれており、左へ行くほど集団活動、教室での活動に近づいた段階としている（Table 3）。この段階は、登校サポートセンターでの「がんばりチェックシート」の支援段階を参考にして、学校生活に当てはまるようにした。段階ごとに点数化し（3点～0点）、それぞれの点数を見ながら、目標設定や支援の方向性を決定する際の参考にできる。

Table 3 「自己目標設定シート」の支援段階（点数）

3点←2点	2点←1点	1点←0点
教室復帰への具体的な計画段階	別室内外で、校内の人とかかわりをもつ段階	別室登校を安定させる段階

### 3.4.2 支援の方向性を共有する手だて

別室登校生徒と学級担任とで記入した「自己目標設定シート」は他の教職員間でも供覧し、生徒本人の課題と目標を情報共有したうえで支援にあたる。短期目標の期間（1か月）を目安に、別室登校生徒と学級担任とで「自己目標設定シート」を再度使い、課題と目標（短期目標と長期目標）について見直しを行う。「自己目標設定シート」は使用の都度、供覧を行うようにする。また、具体的な支援方法を考えるための参考資料として「支援プログラム（案）」（資料5）を作成した。この「支援プログラム（案）」は、「支援プログラム（ふれあい教室 2016）」をもとにしている。

供覧に加えてカンファレンスを行い、支援の具体的な方法、方向性について教職員が話し合って共有する時間をとることもできる。本研究では、a群の2校でカンファレンスを行う。カンファレンスでは「自己目標設定シート」の情報、別室利用状況や連携機関等を確認しながら、別室登校生徒本人の目標達成のための具体的な支援方法について話し合う。話し合う際に「個別支援シート」（資料3）を使用する。カンファレンスは「カンファレンスの持ち方」（資料4）に沿って進める。

### 3.5 研究計画

研究計画は Table 4 のとおりである。

Table 4 研究計画

月	本研究に関する計画	実施する内容
4	課題研究打合せ会① 課題研究打合せ会②	研究主題，構想の検討
5	第1回課題研究会議	研究内容と方法の検討
6	第2回課題研究会議	研究対象校の検討
7		研究対象校の決定
8		研究対象校への依頼と説明 事前アンケート実施
9	第3回課題研究会議	研究対象校別室での「自己目標設定シート」使用（1回目）
10	第4回課題研究会議	研究対象校でのカンファレンス実施（a群のみ）
11	第5回課題研究会議	研究対象校別室での「自己目標設定シート」使用（2回目） 事後アンケート実施
12	第6回課題研究会議	アンケート結果分析 意見・感想の集約
1	第7回課題研究会議	
2	第8回課題研究会議	

## 4 結果

教職員を対象とした意識調査の結果を示す。対象教職員の人数は a 群が 26 人、b 群が 35 人であった。なお、各項目の集計では無回答を除外し、有効回答数をグラフ内に示した。

### 4.1 教職員の変容

#### 4.1.1 事前及び事後アンケートより

「自己目標設定シート」使用（a 群および b 群）、カンファレンス実施（a 群のみ）前後の教職員意識調査結果を比較した。

別室登校生徒への指導の計画性について調査した。各項目別の人数の推移は、Figure 2 のとおりである。a 群は「大まかな計画がある」の割合が増え、b 群は減った。a 群、b 群共に「まったく計画がない」の割合が減った。

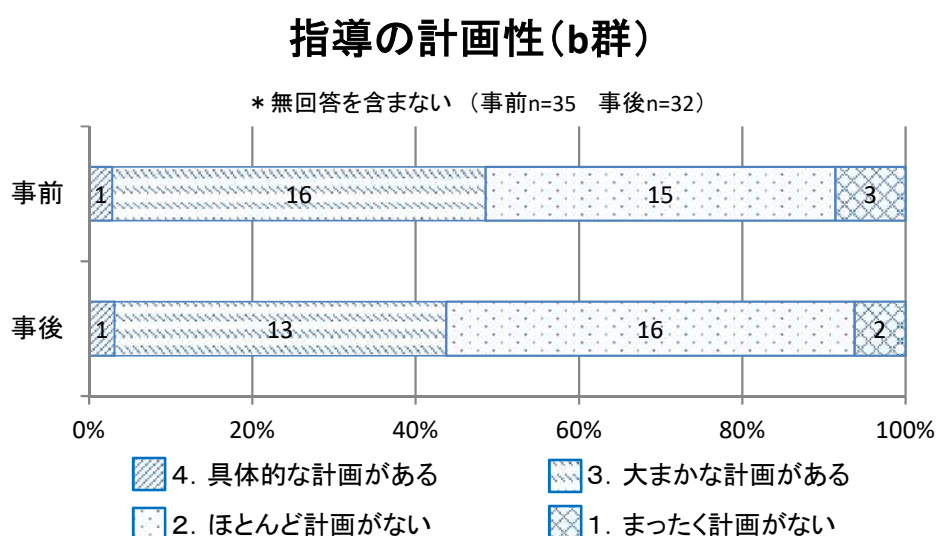
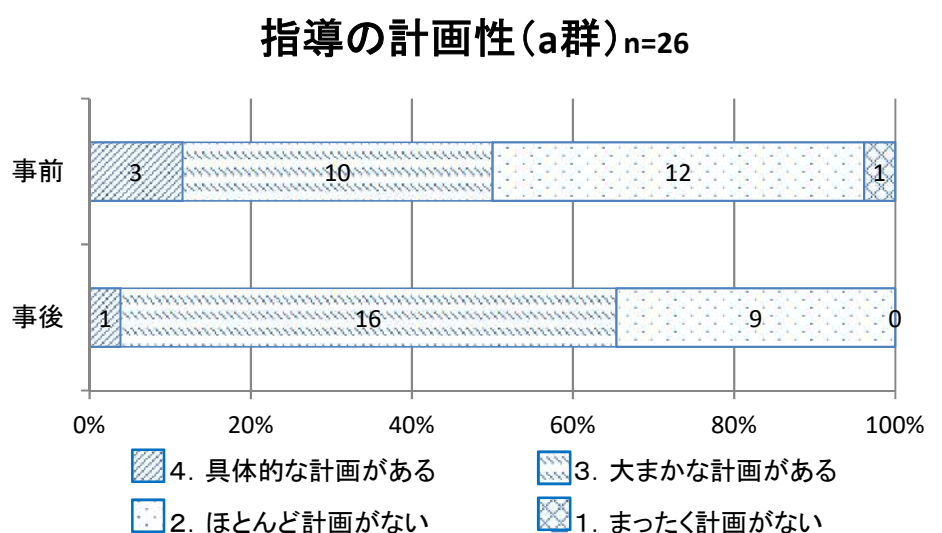


Figure 2 別室登校生徒への指導の計画性

別室登校生徒のもつ課題の把握について調査した。各項目別の人数の推移は、Figure 3 のとおりである。a 群は「まったく困難ではない」の割合が増え、a, b 群共に「とても困難」の割合が減った。しかし、a 群, b 群共に「やや困難」の割合が増えた。

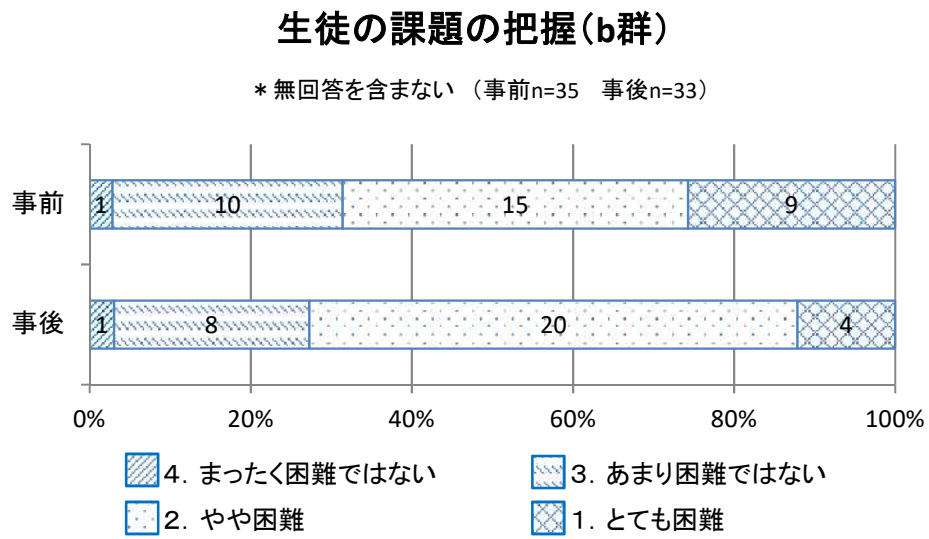
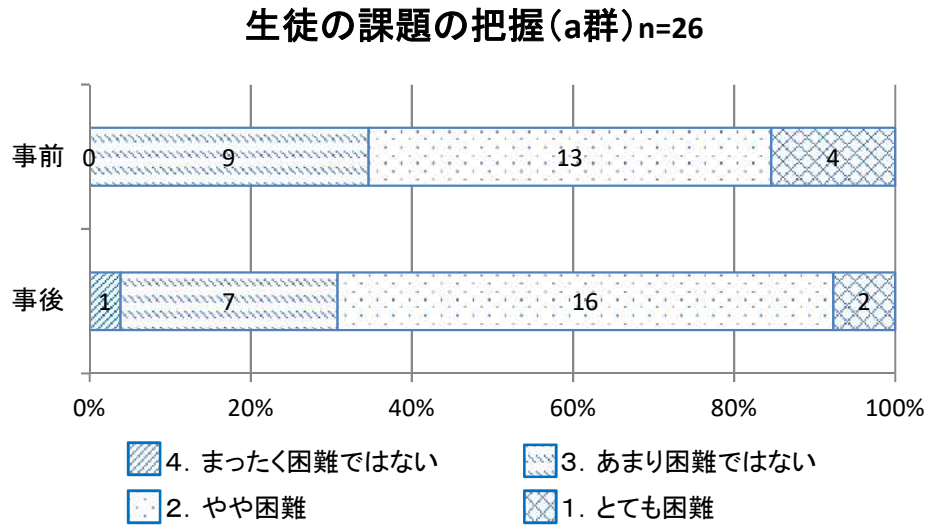


Figure 3 別室登校生徒のもつ課題の把握について

別室登校生徒にかかわる教職員同士の連携について調査した。各項目別の人数の推移は、Figure 4のとおりである。a群、b群ともに「やや困難」の割合が増え、b群は「まったく困難ではない」の割合が増えて「とても困難」の割合が減った。

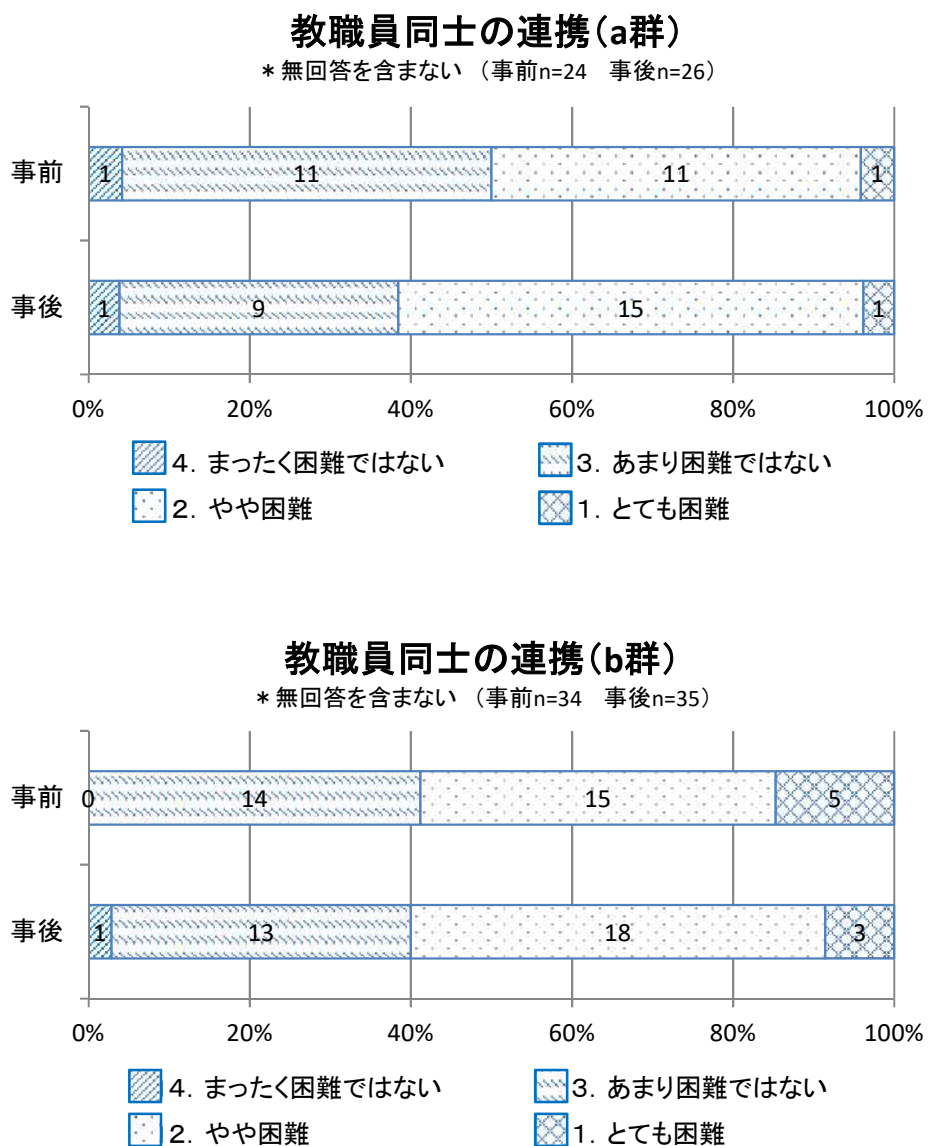


Figure 4 別室登校生徒にかかわる教職員同士の連携について

別室登校生徒への指導・支援の見通しについて調査した。各項目別の人数の推移は、Figure 5 のとおりである。a 群, b 群共に「やや支援の見通しをもつことができる」の割合が増え、a 群は「大いに見通しをもつことができる」の割合も増えた。また、b 群は「まったく見通しをもつことができない」の割合が減った。

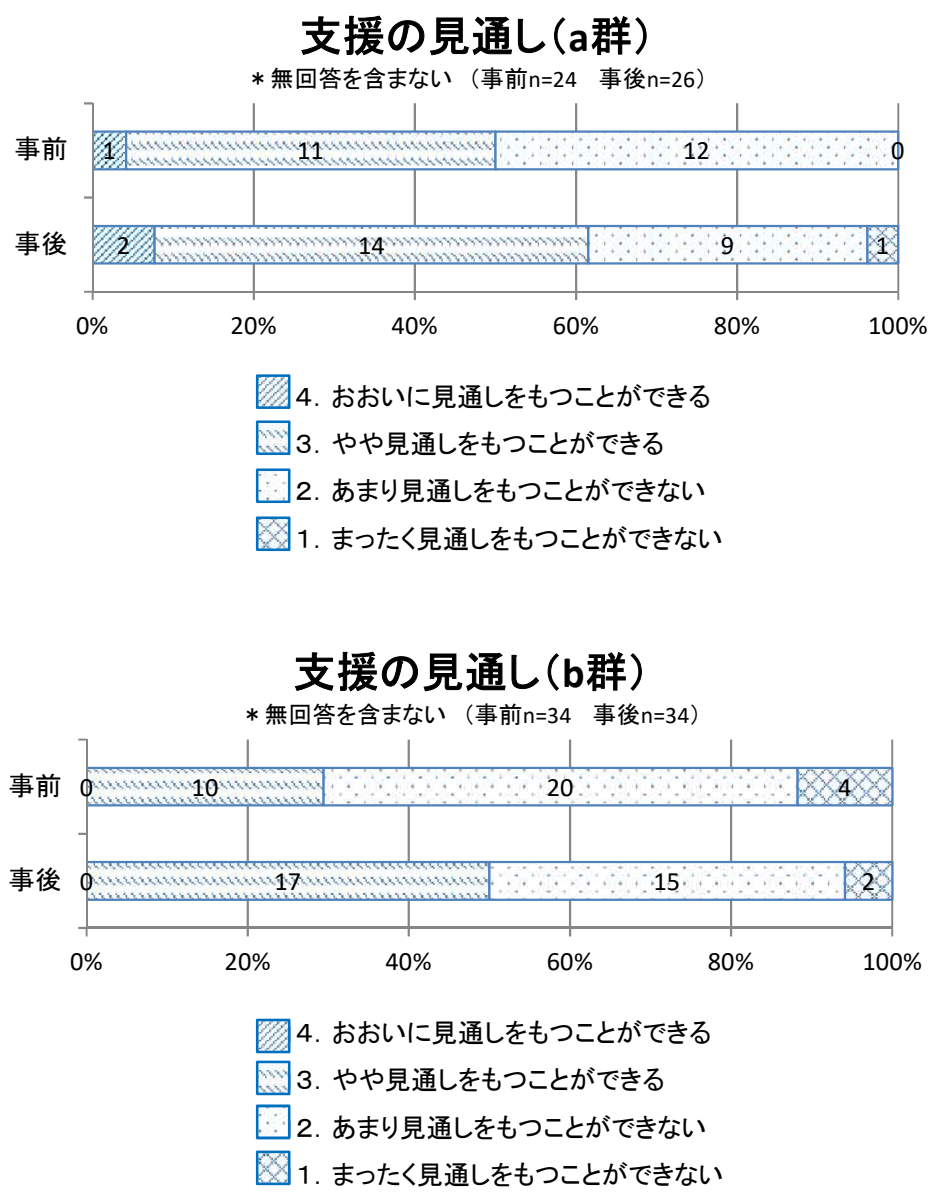


Figure 5 別室登校生徒への指導・支援の見通しについて

#### 4.1.2 記述回答より

「自己目標設定シート」(a群およびb群)とカンファレンス(a群のみ)に対する意見・感想の記述式回答を、以下(Table 5~Table 8)に示す。

Table 5 「自己目標設定シート」についてよかった点(a群およびb群)

別室登校生徒の理解(現状・課題等)やかかわり方について
<ul style="list-style-type: none"> <li>・別室登校生徒との会話のきっかけとなり、目標に向けて前向きな話ができた。</li> <li>・生徒がどのようなことを考えているのかを把握でき、本人の目標を意識したかかわりができた。</li> <li>・具体的に項目があり、どれができているかなど一緒に見返せてよかった。</li> <li>・「できたね」「やったー」という会話はこちらもうれしくなった。</li> <li>・それぞれの生徒が設定した目標なので、指導やかかわり方がより明確になった。</li> </ul>
教職員間の連携、情報交換について
<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象生徒の目標が、生徒とも教師間でも共有でき、一貫した指導ができた。</li> <li>・このシートをもとに、生徒の詳しい状況について教職員間で話ができ、可能な手立てを考えることができるのは良い。</li> <li>・該当生徒の情報や課題解決のための方策を共有することができてよかった。</li> <li>・情報共有として、空き時間に見ることができる。</li> <li>・別室登校生徒への対応は各学年にまかせている部分も多かったが、今回のシート活用、閲覧により、以前より深く関わったり、職員間で共有できたりしたことが、ありがたかった。</li> </ul>
計画性・見通しについて
<ul style="list-style-type: none"> <li>・目標を設定することで、支援の見通しを立てやすくなるのでとても有効だと思う。</li> <li>・生徒自身が短期・長期目標を立てることで、別室での過ごし方に意欲がもてるし、教員にとっても声がかかりやすくなる。</li> <li>・望ましい姿が書かれているので、目標を立てやすい。</li> <li>・停滞している中で、どういった手立てをとればいいのか考えることができた。</li> <li>・シートをツールとして生徒と話をするきっかけになり、本人も職員も見通しをもって活動できたりかかわったりできるようになる。</li> <li>・生徒たちの意識は、シートに記入することで変わってきたと思う。</li> <li>・教室に入るための現在の対応として別室登校をしているということを、生徒も学校も再確認して、そこまでの道筋を考える一助になる。</li> <li>・小さな目標を決め、ひとつずつ達成できたことを確認、できなかったらなぜできなかったかを考えていく。</li> <li>・教職員間の情報共有や、別室登校そのものを見直すきっかけとなった。</li> </ul>

Table 6 「自己目標設定シート」について改善すべき点

別室登校生徒の理解（現状・課題等）やかかわり方について
<ul style="list-style-type: none"> <li>・長期間、登校できていない生徒へのアプローチが少し難しい。</li> <li>・「自己目標設定シート」の内容が、実際の様子とかけ離れている。</li> </ul>
教職員間の連携、情報交換について
<ul style="list-style-type: none"> <li>・作成後、教師間での共有がすぐにできなかった。</li> <li>・状況が刻々と変わるので、シートが追い付かない。</li> <li>・情報を知るだけにとどまり、実際に校内で別室登校生徒とかかわる時間がなかった。</li> </ul>
計画性・見通しについて
<ul style="list-style-type: none"> <li>・今回対象にした生徒は週に2日程度の登校がやつの生徒で、継続性がなく難しかった。</li> <li>・様々な背景を持った別室登校生徒がいるので、全ての生徒に適用するのは難しいと感じる。</li> </ul>

Table 7 カンファレンスについてよかった点（a群のみ）

個別支援シートについて
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「自己目標設定シート」が点数化され、強み、弱みがグラフで視覚化されてわかりやすかった。</li> <li>・とても見やすく構成されているので、該当生徒のことを一度に理解しやすかった。</li> <li>・学年以外の者でも、家庭環境やスキルグラフなど現状を把握しやすかった。</li> <li>・対象生徒の課題や長期・短期目標が一目でわかり、情報の共有に活用しやすい。</li> <li>・一度に必要な情報を簡潔に記入できるので、カンファレンスの際に活用しやすい。</li> </ul>
カンファレンスについて
<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報共有、支援の方向性の共有がはかられ、よかったと思う。</li> <li>・項目も多すぎず、やりやすかった。</li> <li>・いつもは不登校生徒の情報共有は学年会だけなので、あのような場を設定できてよかった。</li> <li>・生徒について話す時間を設けたことで、その子に対してどう対応していけばよいかわかった。</li> <li>・生徒の詳しい状況について教員間で話ができて、みんなで可能な手立ての案を出し合えた。</li> <li>・紙面に載せきれない情報や支援の仕方について話し合うことはとても大切だと思った。</li> <li>・担任の先生の思い、学年の思いを聞き、共有できたことはよかった。</li> <li>・その子どもの目標に向けて、自分がどのように関わられるか考えることができた。</li> </ul>

Table 8 カンファレンスについて改善すべき点（a群のみ）

個別支援シートについて
<ul style="list-style-type: none"> <li>・個別支援シートに記入できるだけの情報を、担任を中心に収集しておく必要がある。それができていないと、カンファレンスを行う意味がなくなってしまう。</li> <li>・長期目標、短期目標を設定し、目標達成に向けた手だてを記入するが、その結果どうなったかの報告欄がない。</li> </ul>



## 4.2 別室登校生徒の変容

### 4.2.1 教室復帰に向けた行動の変化

1回目と2回目の「自己目標設定シート」の得点の変化は、Table 9 のようになった。

Table 9 得点の変化（合計点）

	a 群（4人）	b 群（4人）
上がった	2人	0人
変化なし	1人	1人
下がった	1人	1人

\*b 群の4人のうち2人は、登校の状況により2回目の「自己目標設定シート」が使用できていない。

「自己目標設定シート」使用前後の、別室登校生徒の行動の変化は、Table 10 のようになった。

Table 10 教室復帰に向けた行動の変化

	a 群（4人）	b 群（4人）
前進（教室完全復帰，教室登校回数増加）	1人	1人
停滞（別室登校の継続）	2人	1人
後退（別室登校回数減少，不登校になった）	1人	0人

\*b 群の4人のうち2人は、登校の状況により2回目の「自己目標設定シート」が使用できていない。

a 群で得点の上がった2人は、行動の変化は「停滞」となったが、別室で過ごす時間内に学習や教職員との会話が増えた。a 群で行動の変化が「前進」となった生徒は「自己目標設定シート」の得点には変化がなかったが、カンファレンスで教職員が役割分担を行い、授業へ参加できるようになった生徒である（Figure 6 生徒 B, Table 12）。b 群で行動の変化が「前進」となった生徒は「自己目標設定シート」の得点は変化がなかったが、教室へ入る回数は増えた（Figure 7 生徒 H, Table 13）。

### 4.2.2 「自己目標設定シート」で立てた目標に向けての行動の変化

「自己目標設定シート」で立てた短期目標に向けての行動の変化は、Table 11 のようになった。

Table 11 目標達成に向けた行動の変化

	a 群（4人）	b 群（4人）
目標を達成した	1人	0人
目標達成に向け進捗している	1人	1人
目標達成は難しく，目標の見直しが必要	2人	1人

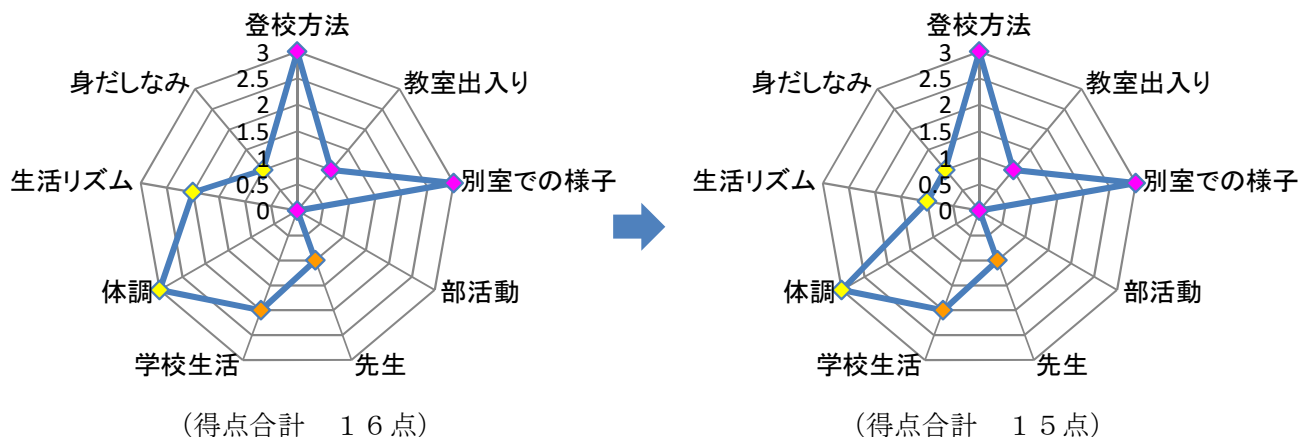
\*b 群の4人のうち2人は、登校の状況により2回目の「自己目標設定シート」が使用できていない。

a 群で目標を達成した生徒は、カンファレンスで教職員が役割分担を行い、授業へ参加できるようになった生徒である。目標の見直しが必要となった生徒は3人いたが、いずれの生徒も2回目の「自己目標設定シート」使用時に、1回目に立てた目標について苦手に思うことがあること等、教職員と話し合うことができた。

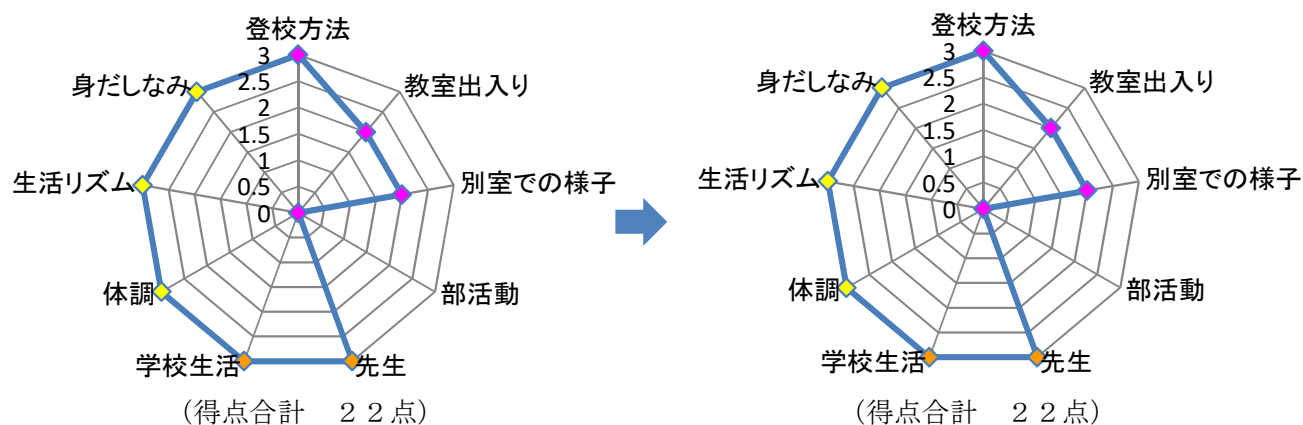
### 4.2.3 各別室登校生徒の「自己目標設定シート」得点の変化

「自己目標設定シート」を2回使用できた別室登校生徒の得点の変化をグラフで表した結果は、以下のようになった (Figure 6、Figure 7)。

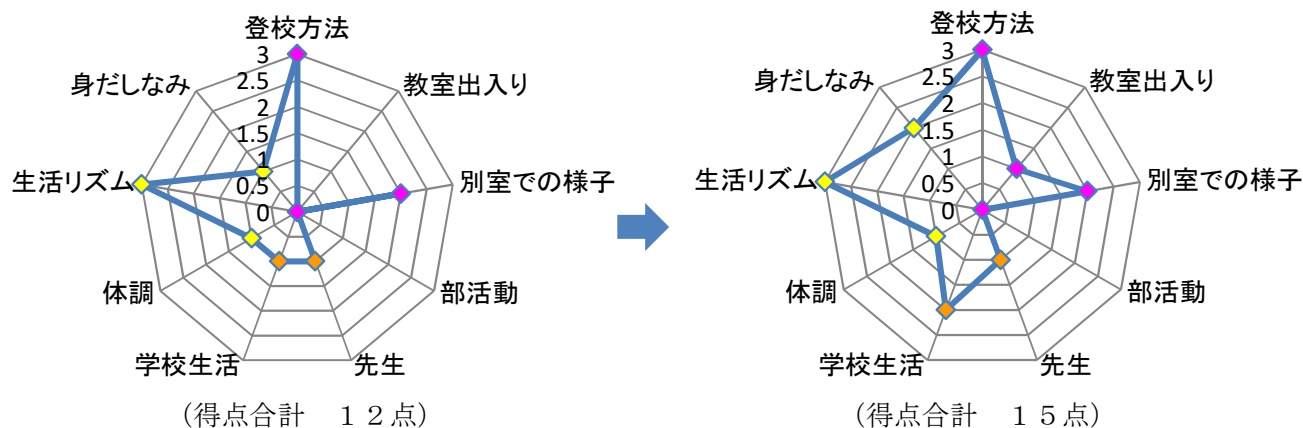
【a群 生徒A】



【a群 生徒B】



【a群 生徒C】



【a群 生徒D】

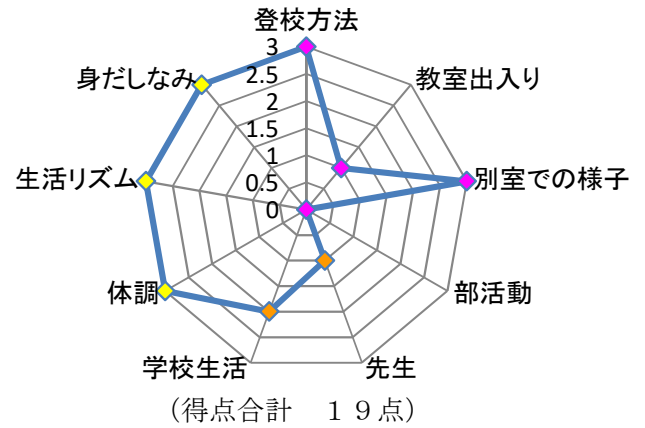
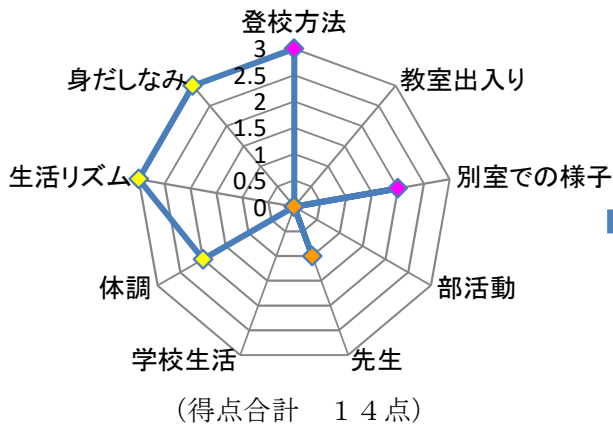
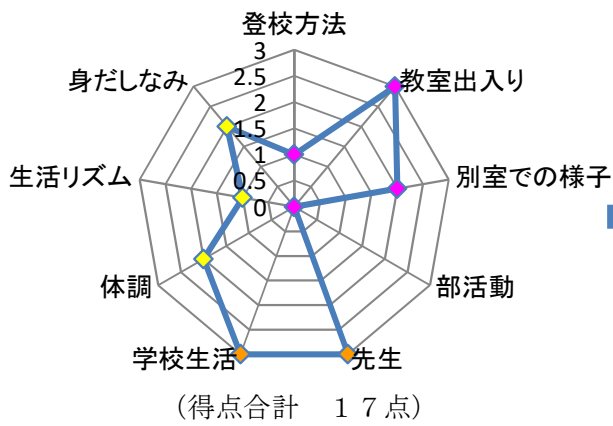


Figure 6 別室登校生徒の得点の変化 (a群)

【b群 生徒G】



【b群 生徒H】

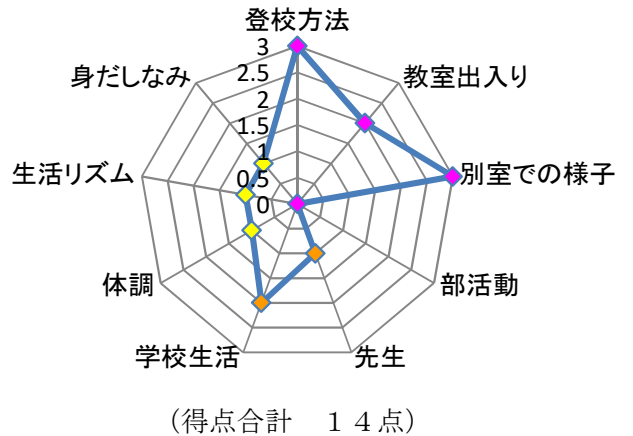
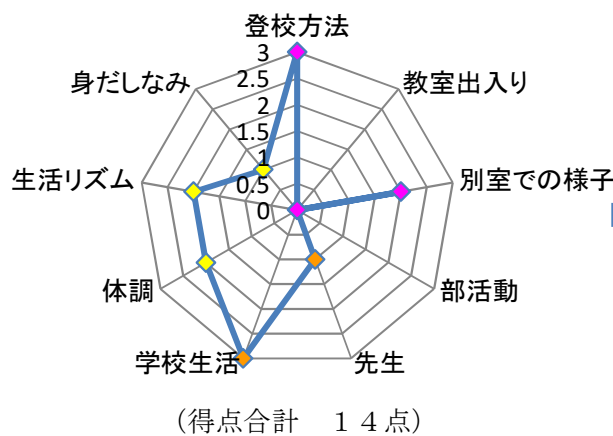


Figure 7 別室登校生徒の得点の変化 (b群)

別室登校生徒により、得点の増減が様々であったが、このうち、教室復帰に向けた行動の変化が「前進」になった生徒（生徒 B、生徒 H）の事例を次にあげる（Table 12, Table 13）。

Table 12 生徒 B（a 群）の事例

得点合計		行動の変化
事前	事後	前進 (教室回数増加)
2 2	2 2	
短期目標		目標達成度
音楽の授業に参加する		目標達成

生徒 B の短期目標である「音楽の授業に参加」をするために、具体的な役割分担（音楽室まで付き添う教職員、音楽室での過ごし方、教科担当との接触方法や授業時間内の距離感、教室内で頼りになる友人、歌う場所、見守る教職員等）を確認し、音楽の授業と文化祭での合唱への参加を達成した。

Table 13 生徒 H（b 群）の事例

得点合計		行動の変化
事前	事後	前進 (教室回数増加)
1 4	1 4	
短期目標		目標達成度
水曜日は登校し、金曜日は登校サポートセンターに通級する		進捗している

生徒 H は、別室登校する曜日と登校サポートセンターへ通級する曜日を具体的に決め、併用するペースを作った。別室登校した際には担任と合唱練習を積み重ね、教室やりハーサルの場に入っていく等、集団活動に参加する回数を増やすことができた。別室にクラスメイトたちが会いに来る機会を作り、徐々に別室の外へと活動範囲を広げていった。

生徒 B、生徒 H はどちらも「自己目標設定シート」の得点は変化しなかったが、教室へ入る回数を増やすことができた。そのうち、カンファレンスを行った a 群の生徒 B については、本人の目標を達成させるための具体的な支援方法を決め、教職員が役割分担をして働きかけを行った結果、期間内に目標を達成することができた。

## 5 考察

「自己目標設定シート」を活用して計画性を持ち、別室登校生徒の現状や課題を把握し、その生徒に合った支援の手だてを考え、それを教職員間で共有することで、教職員が支援の方向性を共有し、より見通しをもって支援にあたるような校内体制づくりにつながったかを、教職員の変容と別室登校生徒の変容より、以下のように考察した。

### 5.1 教職員の変容より

まず、事前及び事後アンケートの結果より、別室登校生徒への指導の計画性について、a群の教職員の意識により良い変化がみられた (Figure 2)。a群の学校ではカンファレンスを行っているため、いろいろな立場から別室登校生徒に関わる教職員が意見を出し合える時間を確保することができた。別室登校生徒の現状、課題を把握しながら、その生徒の目標達成に向けて支援する具体的な方法を考え、役割分担をする機会となり、大まかな計画を立てることにつながったと考える。

別室登校生徒のもつ課題の把握について、a群、b群共に「とても困難」の割合は減ったが、肯定的な意見の増加までには至らなかった (Figure 3)。生徒によっては「自己目標設定シート」の内容が実際の様子とかけ離れている等、直接課題の発見や把握にはつながらなかったケースがあったためと考えられる。

別室登校生徒にかかわる教職員同士の連携について、a群、b群共に「やや困難」の割合が増えた (Figure 4)。「自己目標設定シート」を供覧することによって、短時間で複数の教職員が情報を共有できることはこのシートの利点であったと考える。しかし、各別室登校生徒に対し各教職員がどういったかかわりをしていくかを教職員同士で連携するためには、Table 6の教職員間の連携に関する改善点にあがっているように、供覧だけでは不足する部分があったと考えられる。また、カンファレンスで役割分担を確認しても別室登校生徒本人の登校が止まってしまうケースもあり、教職員が連携できたと実感するには至らなかったことも考えられる。

別室登校生徒への指導・支援の見通しについて、a群、b群共に、事後の意識調査のポイントは上がった (Figure 5)。「自己目標設定シート」やカンファレンスにより、別室登校生徒の現状や課題を把握し、その生徒に合った支援の手だてを考え、それを教職員間で共有することは、教職員が支援の方向性を共有し、より見通しをもって支援にあたるような校内体制づくりにつながる一助になるのではないかと考える。

次に、記述回答より「自己目標設定シート」についてよかった点としては「別室登校生徒と教職員との会話のきっかけになった」「生徒自身が別室登校に目的意識や意欲を持つことができた」という回答が複数あった。また「自己目標設定シート」を使って教職員間で情報共有をすることについて「目標を把握でき一貫した指導につながる」「空き時間に見ることができる」等よかった点が複数あげられた (Table 5)。一方、改善すべき点として「自己目標設定シート」を供覧すれば、シート上に表れている事柄については情報共有が図れるが、情報を知るだけにとどまり、実際に校内で別室登校生徒とかかわる時間を確保できない現状もある、という意見もみられた (Table 6)。カンファレンスについて、カンファレンスとその土台となる「個別支援シート」については、おおむね肯定的な意見が出ている (Table 7)。一方、改善すべき点として「個別支援シート」に結果の報告欄がないという意見も出ていた (Table 8)。

以上の変容から、まず「自己目標設定シート」の効果についてまとめる。教職員は「自己目標設定シ

ート」の項目を見ながら別室登校生徒ができていたことを見返したり、本人が考えていることを把握して本人の目標を意識したかかわりを考えたりすることができた。平田（2018）は「アセスメントを行うことで、本人はもちろん周囲の大人がその後の展望を持ちやすく、本人への過度な教室復帰の促しや声かけを避け、また適切な時期に教室や行事へのつなぎを行うことが出来る」と述べている。さらに「このような周囲の大人の見通しがあることにより、生徒にとって別室がより安心して過ごせる空間となり、なおかつ生徒の状態にあった働きかけを行うことが可能」としている。本研究でも、生徒 B、生徒 H の事例に見られたように、別室登校生徒と教職員が「自己目標設定シート」を使い、目標や目指す姿が定まったことで、教職員のかかわり方に具体性が出て、生徒は教室復帰に向け行動を前進させることができた。

今回の研究では「自己目標設定シート」を供覧した範囲は、各学校により異なっている。各学校の規模や、別室登校生徒数等に合わせ、必要な範囲で「自己目標設定シート」を供覧すると効果があると考えられる。別室登校生徒の目標や目指す姿が示される「自己目標設定シート」は、別室登校に計画性や見通しをもたせるために活用できたと考えられる。

次に、カンファレンスの効果についてまとめる。Figure 2 の結果にもあったように、「自己目標設定シート」を供覧するだけよりも、カンファレンスを行って各々のかかわり方を確認し、情報共有する時間をとることで、より計画性をもって支援にあたれるようになったと考えられる。さらに、今後改善できることとして、カンファレンス後の経過について情報交換を行い、別室登校生徒に対してのかかわり方を見直すタイミング等についても考えていく必要がある。今回、カンファレンスの時間設定の目標は 10～15 分としていたが、実際は 2 件とも、20～30 分かかった。時間を圧迫しすぎず必要事項を確認するために「カンファレンスの持ち方」（資料 4）の内容や進め方に改善の余地はある。

最後に、今回の研究では別室登校生徒のもつ課題の把握と、教職員同士の連携について、より良い結果には至らなかったことについてまとめる。「自己目標設定シート」や、別室での支援を行える環境を用意していても、別室登校生徒の登校が安定しない、生徒を取り巻く生活背景が刻々と変化する等、生徒個々により様々な状況があった。別室登校生徒の状況は良くなるケースばかりではなく、現状と変わらないケースや、時には悪くなるケースもあり得る。別室登校生徒や長期にわたり不登校となっている生徒へのアプローチの難しさについて、再確認した点があった。

## 5.2 別室登校生徒の変容より

別室登校生徒の変容については、何らかの法則性は見つけられなかった。取り組み期間が短いこともあるが、a 群、b 群のどちらの学校でも、直接「自己目標設定シート」で立てた目標を達成した生徒は少なかった。しかし、教職員と共に「今の自分」について見つめ、できていることに自信をもち、できるようになりたいことを教職員と共有する時間が別室の中で確保されたことは、別室登校に目的意識をもたせることにつながったと考える。目標が達成されたとしても、目標を見直すことになったとしても、彼らの次のステップを具体的にするために有効な振り返りの時間になり得る。

a 群、b 群どちらの学校においても、教職員が個々の生徒に応じて、配慮をしながら関係をつくり、時間をつくって対応を続けてきている。この積み重ねがあることで、別室登校生徒らは個々のペースではあるが登校し、別室で過ごすことができていく。教職員の記述回答で「別室登校の生徒にとって、別室は学校との関係性を持つための大切な空間。教室復帰ということを強く指導することで、学校との接点

がなくなってしまう可能性もある。もっと柔軟な受け入れ体制も必要。もちろん、教師の負担がこれ以上大きくなならない状況で。」という意見があった。「自己目標設定シート」を活用して別室登校生徒の現状や課題を把握し、その生徒に合った支援の手だてを考え、それを教職員間で共有することで、教職員が支援の方向性を共有し、より見通しをもって支援にあたるような校内体制づくりを進めることは、一つの受け入れ体制として活用できるものであると考える。

## 6 研究のまとめ

### 6.1 成果

#### 6.1.1 「自己目標設定シート」によるアセスメントの効果

学校での別室登校は、生徒の登校頻度も様々である中、担当者あるいは空き時間の教職員がその日の内容を考えて対応している。この限られた時間と機会において、生徒の現状や課題を知るために「自己目標設定シート」という1つのアセスメントツールを使用し、該当生徒とシートを挟んで対話をしたり、目標を設定したりできたことは、支援の方向性を決めるうえで有効であったと考える。

また、各項目を点数化することで強み、弱みを見立てることができ、その見立てから目標を設定し、生徒自身がスモールステップで目標達成に向けて行動できるよう、教職員が支援方法を考えることができたと考える。

「自己目標設定シート」は、目標の見直しをする期間を決め、現状や目標に向けての進捗状況を繰り返し確認できる。そして、全ての項目の点数を上げることを目的とはせず、重点的にかんばりたいことを明らかにすることを目的として使用する。なんとか別室登校できているという状況の生徒に対し、多方面からあれもこれもとがんばらせて負担をかけることなく、生徒自身の現状を把握したうえで目標を絞り、行動を変えていけるよう計画を立て、教職員が支援の方向性を揃えて、励まし、できたことをほめることができるようアプローチの方法をふりかえるツールとしても「自己目標設定シート」は有効であったと考える。

#### 6.1.2 「自己目標設定シート」を活用し支援の方向性を共有する校内体制づくり

今回作成した「自己目標設定シート」は、目標を記入する欄を入れたことで、方向性や見通しをつけやすくなった。「自己目標設定シート」上には目標設定をしていく別室登校生徒と担当者の思いが残されていて、別室登校生徒の「今ががんばりたいこと」が見える。これを供覧しておくことで、別室の内外を問わず、それぞれの教職員がその別室登校生徒と関わる際の声かけや働きかけの方向性が、揃っていくと考えられる。別室登校生徒の現状、課題、目標を1枚のシート上で見ることができる「自己目標設定シート」は、支援の方向性を共有するために有効であったと考える。

今回の研究では a 群の学校で「自己目標設定シート」の情報も記載した「個別支援シート」を使い、カンファレンスを行った。カンファレンスの利点は、複数の教職員が意見を交わしながら別室生徒の課題を分析し、具体的な支援方法を検討できることだと考える。しかし、多忙な学校の日常の中で、カンファレンスに長時間を割いてしまうと、教職員の負担感が増えカンファレンスは実施しづらくなってしまふのが現実だと思われる。今回は「個別支援シート」を使うことで、話し合うポイントを絞り、時間を短縮できるよう工夫した。この「個別支援シート」には、別室登校生徒の「自己目標設定シート」の内容と、カンファレンスで話し合った役割分担や支援の方向性を記録して残すことができ、教職員がア

アプローチの方法を見直すのにも活用できたと考える。また、自校の教職員だけでなく、保護者や地域の協力を得て支援を行う方法についても、実際に意見を出し合うことができた。

## 6.2 課題

「自己目標設定シート」の目標が別室登校生徒本人の現状に合っているかを客観的に見ていくためには、定期的に目標を見直したり、カンファレンス等で複数の視点から考えたりする必要がある。その結果、目標達成率が上がり、生徒や支援者にとっての励みにつながっていくのではないかと考える。また「自己目標設定シート」から具体的な支援方法を考えるための「支援プログラム(案)」を作成したが、今回の実践では参考資料にとどまった。多様な別室運営があり、様々な別室登校生徒がいる中で、シートや支援方法に汎用性を持たせることは難しいが、教室復帰に向けてステップアップしていく流れが視覚的にもわかり、教職員と別室登校生徒がコミュニケーションを重ねていくためのツールとして、学校独自の改良を加える等さらに発展できる可能性がある。

また、別室登校について、教室復帰を最終目標とする段階的な措置としての運営方法、学校内で安心できる居場所として機能させる運営方法、その他様々な見方、考え方による課題が、今後出てくると考えられる。しかし、生徒を教室で受け入れるにせよ、別室で受け入れるにせよ、生徒の現状や思いを理解しながら、生徒が徐々にステップアップし自信をつけられるような学校での受け入れ方針を整えていく必要がある。そのために、不登校生徒を支援するノウハウを積み重ねてきた登校サポートセンターが、学校とさらに協力体制を強めていくことも求められると考える。登校サポートセンターでは、個別の相談をしている段階の生徒が集団活動に参加していく際に、受け入れ上配慮が必要な点について、指導員と通級生が確認できる事項をまとめたシートや、集団活動への参加のペース、活動内容等を指導員同士が確認する機会をつくっている。これらの取り組みについても、学校の別室で活用できる形にアレンジできるよう、学校と登校サポートセンターがさらに連携を強めていきたいと考える。



## 引用文献

- 阿部 郁美・青木 真理 (2017). 効果的な「別室登校」支援のあり方について——福島県における実態調査からの考察—— 福島大学総合教育研究センター紀要, 23, 41-47.
- 青木 真理 (2016). 別室登校について——効果的な保健室登校指導についての一考察—— 福島大学総合教育研究センター紀要, 21, 17-21.
- 小野 昌彦 (2010). 不登校への行動論的包括支援アプローチの構築 風間書房
- 平田 祐太郎 (2018). 不登校生徒に対する別室を活用した多面的支援システムのあり方 鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集, 85, 29-40.
- 小泉 隆平・中垣 ますみ・中川 靖彦・由良 渉・奥澤 嘉久・吉田 晴美 (2015). 効果的な「別室登校」児童生徒支援に関する一考察——教職員間の情報共有を巡って—— 京都教育大学紀要, No. 127
- 文部科学省 (2019). 不登校児童生徒支援への支援の在り方について (初等中等教育局長通知)
- 野口 智世・瀬戸美奈子 (2016). 不登校におけるチーム援助の実践と課題——A市小学校への調査をもとに—— 三重大学教育学部研究紀要, 教育科学, 67, 309-314.
- 隅元 みちる・富本 祐加・松本 剛 (2012). 中学校における別室登校の実態調査——運営と生徒支援のあり方の検討—— 兵庫教育大学研究紀要, 41, 155-160.
- 山本 岳・小泉 隆平・服部 康子・横山 智子・中川 靖彦・由良 渉 (2011). 別室登校——別室登校児童生徒の実態把握と支援の在り方—— 京都府教育委員会
- 山本 岳・小泉 隆平・服部 康子・横山 智子・中川 靖彦・由良 渉 (2012). 別室登校Ⅱ——教室復帰に効果的な関わり—— 京都府教育委員会
- 山本 岳 (2013). 別室登校を実施する際の課題と工夫——これまでの経験と調査研究を踏まえて—— 月刊学校教育相談, 27(12), 26-29.
- 四日市市教育委員会 (2005). 子どもの心を見つめて——不登校の子どもへの指導の手引——
- 四日市市適応指導教室 (2015). 再登校を促す支援方法についての一考察——適応指導教室における実践を通して—— 四日市市教育委員会教育支援課研究調査報告, 397
- 四日市市適応指導教室 (2016). 不登校児童生徒に再登校を促す支援方法についての一考察 (2年次) ——適応指導教室における支援モデルの実践を通して—— 四日市市教育委員会教育支援課研究調査報告, 400

# 自己目標設定シート 月 日 名前( )

<短期目標>

期間は「1か月」

【目標欄】1～9の項目から、左に進めたい項目を選んで書く等。1つに絞ってもよいし、いくつかまとめてもよい。

一番左3点 ← … → 0点 (本人には点数を見せずに使用。より左へ行くことを目標にする。)

<b>1 登校の方法</b>	自分一人で、登校している	部分的に自分一人で、登校している	保護者と一緒に登校している
<b>2 教室での行き来</b>	授業に入ることがある	授業以外の短時間に入ることがある(昼食、掃除、短学活、行事、式等)	他のクラスメイトがいない時間に入ることがある(朝、放課後等)
<b>3 別室での主な過ごし方</b>	学習(先生に教えてもらう等会話あり)	学習(一人で自習)	学習以外(相談、雑談等、先生や他の生徒と話す)
<b>4 先生との会話</b>	自分の気持ち(断る等も含めて)を伝えていく	自分から挨拶や質問をしている	挨拶を返したり、質問に答えたりしている
<b>5 身体のこと</b>	自分の身体の調子が悪い時、和らげる方法を考えることができる	自分の身体の調子が悪い時、誰かに相談できる	自分の身体の調子が悪い時、気づくことができる
<b>6 学校のこと</b>	教室に入る計画について、先生と話し合うことができる	行事などの参加について、先生と話し合うことができる	別室付近で同級生と雑談することができる
<b>7 部活動のこと</b>	活動に参加することがある	先生や部員から誘われれば、活動に参加することがある	見学をすることがある
<b>8 生活リズム</b>	学校へ遅刻せずに行ける生活リズムで、過ごしている	決まった起床時間や就寝時間で、生活している	計画した日に、朝早く起きることが出来る
<b>9 身だしなみ</b>	毎日、朝起きたら身だしなみを整え、場や季節に応じた服装ができる	休日以外は、朝起きたら身だしなみを整え、場や季節に応じた服装ができる	外に出かける時には、着替えたり、身だしなみを整えることができる

<長期目標>

期間は「今学期」

【資料2】

教職員意識調査（事前／事後）

◆ アンケートにご協力ください。

校内委員会，学級担任，学年担当の先生方にお尋ねします。

どちらかに○を→ 回答月（9月・11月）

○を（複数可）→ 管理職・校内委員会委員・養護・学級担任・学年担当・その他（ ）

（1）別室登校生徒の受入体制について

1. きわめて不十分である
2. やや不十分である
3. まあまあ充実している
4. とても充実している

部屋数，担当できる教員数，  
受け入れられる時間数等

（2）別室登校生徒への指導の計画性について

1. まったく計画がない
2. ほとんど計画がない
3. 大まかな計画がある
4. 具体的な計画がある

利用期間，指導内容等

（3）別室登校生徒の指導に関する教員の負担感について

1. おおいに負担を感じる
2. やや負担を感じる
3. あまり負担に感じない
4. まったく負担に感じない

空き時間の圧迫，対応時間・  
担当の偏り等

（4）以下の①～④について，困難の度合いはどの程度ですか。

① 別室登校生徒とのコミュニケーションについて

1. とても困難
2. やや困難
3. あまり困難ではない
4. まったく困難ではない

② 別室登校生徒のもつ課題の把握について

1. とても困難
2. やや困難
3. あまり困難ではない
4. まったく困難ではない

→裏面に続きます。

③ 別室登校生徒用の学習指導のための準備について

1. とても困難
2. やや困難
3. あまり困難ではない
4. まったく困難ではない

④ 別室登校生徒にかかわる教職員同士の連携について

1. とても困難
2. やや困難
3. あまり困難ではない
4. まったく困難ではない

(5) 学校への登校，教室復帰に向けて，別室登校に効果を感じますか。

1. まったく効果を感じない
2. あまり効果を感じない
3. やや効果を感じる
4. おおいに効果を感じる

(6) 別室登校生徒への指導・支援の見通しをもつことができますか。

1. まったく見通しをもつことができない
2. あまり見通しをもつことができない
3. やや見通しをもつことができる
4. おおいに見通しをもつことができる

(7) 別室登校に関して，お困りの点やお気づきの課題等ありましたらご自由にお書きください。



③「自己目標設定シート」に関して、ご意見、ご感想をお書きください。

(A)「自己目標設定シート」を使用してみて、よかった点

(使い勝手、項目、内容、教職員間の情報共有、生徒とのコミュニケーション等)

(B)「自己目標設定シート」を使用してみて、よくなかった点、改善すべき点

(使い勝手、項目、内容、教職員間の情報共有、生徒とのコミュニケーション等)

(C) その他（ご自由にお書きください）

ご回答ありがとうございました。

【資料3】

個別支援シート（カンファレンス用）の書き方

1. グラフ入力

自己目標設定シートを生徒と一緒に記入し、その結果を入力する。

(例)	①登校方法	②教室出入り	③別室での様子	④先生	⑤体調	⑥学校生活	⑦部活動	⑧生活リズム	⑨身だしなみ
9月	2	1	1	1	1	1	1	1	1
11月	3	2	2	2	1	2	2	1	2

自己目標設定シートの得点は、一番左の項目が3点～一番右が0点。（自己目標設定シートそのものには記載されていない。）

2. 個別支援シート（例）

個別支援シート(カンファレンス用)			
名前	中学校	年 組	カンファレンスを行った日 令和 年 月 日
別室利用状況	別室登校に至った経緯		スキル別グラフ
利用開始時期	学校要因の有無 学習、行事、部活動、 教員・友人との関係等 あれば		<p>上に入力した内容が、グラフで表れます。</p>
1年生5月頃	家庭要因の有無 虐待、家族構成の変化（離婚、死別等）、転居、親の人格特性等 あれば		
<input checked="" type="checkbox"/> 不登校からの復帰段階 <input type="checkbox"/> 不登校の未然防止段階	その他(環境等) 通学困難（距離、利便性）等 あれば		医療・検査の有無
利用回数			ふれあい通級の有無 (〇年生〇月頃～)
週に3回			・〇〇クリニック (□□Dr.) ・授業あり(△△) ・起立性調節障害
1回の滞在は1時間くらい			無
長期目標	別室で、漢字の学習をする。		
短期目標	週に1回は、一人で登校できるようになる。		
短期目標達成のための手だて			
いつまでに	誰が	誰に	何を
1週間(〇月〇日頃まで)	保護者	本人	一人で登校する際の道順、時間をシュミレーション
1～2週間(〇月〇日頃まで)	担任	本人 保護者	一人で登校しやすい時間帯、曜日、動線を確認

(次回カンファレンス予定 月 日)

#### 【資料4】

#### カンファレンスの持ち方

##### 【用意するもの】

- 対象生徒の「自己目標設定シート」
- 個別支援シート（カンファレンス用）
  - A（青色部分）はカンファレンスまでに担任が記入。（グラフ入力もしておく。）
  - B（緑色部分）については、可能ならば担任または担当者が記入しておく。
  - C（ピンク色部分）は、素案があれば記入しておいてもよい。（担任または担当者）
- 家庭環境調査票（参考として必要な場合）
- 欠席3日目シート（参考として必要な場合）

##### 【話し合いの進め方】

- ① 担任または担当者より、生徒の状況を簡単に説明する。A
- ② 別室登校に至った経緯（要因等）を、参加者で確認する。B
  - \* 「不明」もあるか。
- ③ 本人の「自己目標設定シート」の記入内容をふまえ、目標を確認する。  
長期目標（今学期中） / 短期目標（1か月間）
- ④ ③で確認した短期目標を達成するために、具体的な手だてを考える。C
  - \* スキル別グラフを見て、本人の強み、弱みを確認し、参考にする。  
（→ 強みを伸ばすようにすると、成功率が高い。）
  - \* 教員だけでなく、SC、保護者、地域…のできることも考えられる。
  - \* 支援プログラム（案）に、手だての例あり。
- ⑤ 方向性をそろえて支援していく。
  - \* 担当者を中心に、委員会等で随時状況を把握していく。
  - \* 手立てについて、見直しの予定日を設定する。

##### 【カンファレンスのメリット】

- ・ 複数の教職員で、別室生徒の課題・具体的な支援方法を考えることができる。
- ・ 支援の方向性を記録に残すことができ、時間がたってもぶれにくい。



【資料5】

支援プログラム(案)		月 日 名前( )		＜短期目標＞		期間は「1か月」	
目標等	【集団参加力】	他の生徒がいる中で、居心地悪くなく、教職員と一緒に学習や活動ができる。 他の価値観に触れながら、他の生徒と一緒に、学習や活動ができるようになる。					
	【意思表現力】	自分の使う言葉の特徴を知るとともに、自分の気持ちに合う表現の仕方や語彙を増やす。 気持ちに合った言葉を使って相手に伝えることができる。 自分の気持ちを整理し、相手にわかりやすく伝えることができる。 場面や相手(人数)に合わせた言葉づかいができ、声の大きさを調整して話すことができる。					
	【生活改善力】	自分の今の生活を振り返り、改善する方法について考え、実行することができる。					
		3点	2点	1点	0点		
1 登校の方法	自分一人で、登校している		部分的に自分一人で、登校している		保護者と一緒に登校している		登校はしていない
支援の手だて(例)	別室への入室に必要な支援を考える。(出迎え、挨拶の場所確認等)		登校時に、自分一人で登校する場合の道順、かかる時間等についてシミュレーションを重ねる。		家を出やすい時間帯、一緒に登校できる人の有無等を確認する。		
2 教室との行き来	授業に入ることがある		授業以外の短時間に入ることがある(昼食、掃除、短学活、行事、式等)		他のクラスメイトがいない時間に入ることがある(朝、放課後等)		全く教室に入らない
支援の手だて(例)	入りやすい教科、出入りのタイミング、座席位置、教室内での支援方法を考える。		入りやすい活動、出入りのタイミング、付き添う人等を考える。		入りやすい時間帯、曜日等を考える。		
3 別室での主な過ごし方	学習(先生の教えてもらう等、会話あり)		学習(一人で自習)		学習以外(相談、雑談等、先生や他の生徒と話す)		学習以外(読書、何もしない等、一人で静かに過ごす)
支援の手だて(例)	学習する教科、教えてもらえる人等についての計画を立てる。		取り組みやすい教科、教材を相談して決める。		別室内で本人が話しやすい先生、他の生徒を探る。		
4 先生との会話	自分の気持ち(断る等も含めて)を伝えている		自分から挨拶や質問をしている		挨拶を返したり、質問に答えたりしている		しゃべらないが、うなずいて答えている
支援の手だて(例)	肯定的な言い換えや、代弁による表現の確認をする。言葉と気持ちが一致しているか、振り返らせる。		生徒が自分から発言できた挨拶や質問に丁寧にこたえ、できたことをほめる。		決まった挨拶、YES/NOの2択質問から、徐々に答えを選択できるような質問にしていき、慣れさせる。		
5 身体のこと	自分の身体の調子が悪い時、和らげる方法を考えることができる		自分の身体の調子が悪い時、相談できる		自分の身体の調子が悪い時、気づくことができる		自分の身体の調子がわからない
支援の手だて(例)	不調を相談できたことを肯定的に受け止め、本人に合った方法を共に考える。		調子が悪い時や悩みがあるときに相談できる人、場所を確認する。		挨拶、日常会話の中で、本人の様子について話すようにする。		
6 学校のこと	教室に入る計画について、先生と話し合うことができる		行事などの参加について、先生と話し合うことができる		別室付近で同級生と雑談することができる		別室付近で同級生に会いたくない
支援の手だて(例)	行事の参加方法など、気持ちの伝え方を考え、別室でロールプレイングを行った後に実践させる。		別室付近で話しやすい先生、他の生徒の候補を考え、会い方、話し方をシミュレーションする。		別室内で、モデルとなるやりとりを広げ、自信をつける。(よいやりとりを取り上げ、ほめる。)		
7 部活動のこと	活動に参加することができる		先生や部員から誘われれば、活動に参加することができる		見学をすることができる		行きたくない
支援の手だて(例)	参加の計画を立てる(短いスパンから)。顧問の先生や部員と計画を共有する。		希望に合った見学のタイミング、誘われ方について考える。		部活動への気持ちを、確認する。(参加を目指したい、しばらく休みたい、転部したい等)		
8 生活リズム	学校へ遅刻せずに行ける生活リズムで、過ごしている		決まった起床時間や就寝時間で、生活している		計画した日に、朝早く起きることができる		昼夜逆転等、乱れている
支援の手だて(例)	目標とする登校時間に合わせて起きられるように生活を整えていく。		起きる時間を決める日数を増やす等、目標をスモールステップで高めていく。		就寝時間、起床時間、ゲーム等の時間の設定等、できそうなところから一つずつ目標を立てる(記録する)。		
9 身だしなみ	毎日、朝起きたら身だしなみを整え、場や季節に応じた服装ができる		休日以外は、朝起きたら身だしなみを整え、場や季節に応じた服装ができる		外に出かける時は、着替えたり、身だしなみを整えることができる		服装や身だしなみ(洗顔・歯磨き等)を整えられない
支援の手だて(例)	服装、身だしなみを整えて別室登校できていることをほめ、日数が増えるよう励ましていく。		休日も含めた日々の生活リズムについて、雑談等で話題にあげ、良いところをほめる。		洗顔、歯磨き等、できそうなところから一つずつ目標を立てる(記録する)。		
＜長期目標＞		期間は「今学期」					

**別室登校生徒支援の方向性を共有する校内体制についての研究**  
—「自己目標設定シート」を活用して—

[執筆 者] 四日市市登校サポートセンター 指導員 前田 怜子  
四日市市登校サポートセンター 指導員 北保 絵美  
四日市市登校サポートセンター 指導員 鳥居 かおり  
四日市市登校サポートセンター 指導員 上原 啓江

[指導・助言] 国立教育政策研究所 総括研究官 山森 光陽

---

---

研究調査報告 第412集

**別室登校生徒支援の方向性を共有する校内体制についての研究**  
—「自己目標設定シート」を活用して—

発行 令和2年3月6日  
発行所 四日市市教育委員会教育支援課  
四日市市諏訪町2番2号  
電話 (059) 354-8149  
FAX (059) 359-0280

---

---